

都議会議員選挙出馬表明

中野区 新井健資

大田区 猪塚 武

都議会選挙に向けて

数ヶ月前の新聞にショッキングな記事が掲載されていました。世界各国から中学生が集まり国際親善交流をはかる企画の席上で、自己紹介をかねてお国自慢がされたそうです。各国からの代表がそれぞれ自分の国の自慢をするなかで、日本から参加した女子中学生は「わたしの国には何も誇るところがありません。ですから何も話すことはありません。」とだけ言って壇上を降りてしまったそうです。

私の弱冠28歳ではありますが、少なくとも、私の幼少期は両親から「日本は公害、狭い住居等の問題はあれども、日本はいい国だよ。確かに戦争は負けたけどいち早く荒廃から立ち直り奇跡とよべる経済復興をした。石油ショックの時も現実を直視していち早く抜け出した。日本人は立派だ。」というような話を聞かされてきました。

それが、いつしか誰も「日本はいい国だよ」と言えなくなってしまいました。行き過ぎた中央集権国家の中で身動きができなくなってしまったのです。冷戦構造の終焉の中で敵は硬直した日本のシステムそのものとなってしまいました。

私はもう一度、「日本は確かに問題もある。でも誰よりも問題を直視して自ら変革をした立派な国民だよ。」と世界に向かって、そして次世代の人々に向かって言えるようにしたい。中学生が、胸を張って「私の国はいい国です。皆さんも是非一度暮らしてみてください」といえるような国をつくりたい。そういう気持ちに駆られて自ら政治の世界に飛び込む決意をしました。

小手先の政治技術でなく、あるべき姿である平成維新の理念の実現へむけて骨太な政治姿勢を貫いて参ります。

「いつも挑戦者でありたい」

【新井健資のプロフィール】

1968年東京に生まれる。

1988年都立国立高校卒（中学高校とサッカー部）。

1993年東京大学法学部卒業（第Ⅱ類：公法コース）

（大学時代は4年間応援部に在籍。その後1年間留年し海外約30ヶ国近くを一人旅）。

1993年三和銀行入行。室町支店（日本橋）にて中小企業を中心に融資、外交（営業業務）を2年間経験。その後本部国際審査部へ配属。欧米企業の審査、カントリーリスク審査に携わったのち、1996年3月退職。国際審査部在職中は新入行員の企業審査研修の講師も勤める。

1995年9月より大前研一氏主催の政策学校一新塾にて東京都政を勉強。

日本には国と地方公共団体を合わせて400兆を超える借金があります。400兆と言えば国民一人あたり400万、4人家族で1600万というとてもない額の借金です。さらに調べて見ると、なんと日本は借金の返済の為に借金を繰り返す自転車操業状態でさえあるのです。個人や会社であれば破産状態です。

「なぜ400兆もの借金ができるまで政治家は何もしないの？」

「その400兆は誰が返すの？」

「400兆が返せないと日本はどうなるの？」

私の素朴な、心からの疑問でした。400兆。それは次の世代からの借金です。返せなければ次の世代でインフレが起こります。私は怒りました。私は無責任な前世代の政治家に政治を任す事を辞めることにしました。しかし、日本では政治家になることはとても大変です。私の貯金はたった200万。新婚です。生活費のことも考えると立候補には多額の借金が必要です。

「若者よ！正義感と勇気を持とう」

猪塚は会社を退社し、次世代の政治家として立候補することを決意しました。「猪塚君が議員になって何ができるのか？」何度も聞かれます。やりたいことはあります。いい国を作りたい。でもその前に、前世代の政治家にこれだけは言います。「私は決して子供の金には手を出さない。」400兆の借金を返すのは次の世代です。借金が返せなくてインフレの社会で苦しむのは次の世代です。私には現在の景気が悪いからといって次の世代のポケットに手をつっ込んで今の景気をよくするというそんな無責任なことはできません。

猪塚は正義感と勇気を持って、次の世代の日本を作ります。

葛飾区 古木たけひこ

今の東京が世界でもトップレベルの都市になれたのは、一般市民と呼ばれている人々の汗の結晶であると考えております。一般市民が、会社や商店やその他さまざまな職場で一生懸命に頑張ってきたため、今日の東京の反映があると思います。しかし、政治はどうだったのでしょうか。東京をつくってきた一般市民のために努力してきたと言えるのでしょうか。

では、なぜ現在の政治がこのようにひどい状態に陥ってしまったのでしょうか。これは、利権政治と官僚政治にあると考えています。政治家は、利権を